













## 平井八郎兵衛の巻(四)

八郎兵衛はしきりにお世辭を云つて酒をすゝめる勘十郎の眼の中の邪惡な色を早くも読み取つた。彼がしきりに泊れと云ひ、酔ひ潰さうとしてゐる所に、慥かに何らかの底意があると見て取つた。それを威付きつゝ八郎兵衛の酒豪は、容易に酔ひ潰走ることもなく、しこたま御馳走になつた上で、ほんと潮田の道場を出てしまつたのである。

一方潮田勘十郎としては、今迄相當にあつて世間では天晴れ人よど讀めそやしてゐて呉れたのだから、何處の者ともわからぬ風来君にその名譽と自信をもゆかず、何んとかして相手を討ち果してしまひたいと思つた。醉はして置いて殺すところを兵法と云ふ、小心邪惡な劍術者が、よくやる筋をこの勘十郎も辿り、自ら身を「ほす経路であることに気が付かない。

左の刀を下すと忽ちぐるりと人を腰から覆へされてしまつた。刀を張つてゐる諒は根底から腰を突かれ離れ、たゞいゝ氣持になつて悠然と歩みゆくのであつた。潮田勘十郎としては、明天か夜ではあるし、酔ひの心持も手伝つて、いつかそんなことを念頭から離れて、たゞいゝ氣持になつて歩みゆくのであつた。

一方潮田勘十郎としては、今迄慢心してゐたことだし、弟子も人より讀めそやしてゐて呉れたのだから、何處の者ともわからぬ風来君にその名譽と自信をもゆかず、何んとかして相手を討ち果してしまひたいと思つた。醉はして置いて殺すところを兵法と云ふ、小心邪惡な劍術者が、よくやる筋をこの勘十郎も辿り、自ら身を「ほす経路であることに気が付かない。

左の刀を下すと忽ちぐるりと人を腰から覆へされてしまつた。刀を張つてゐる諒は根底から腰を突かれ離れ、たゞいゝ氣持になつて歩みゆくのであつた。潮田勘十郎としては、明天か夜ではあるし、酔ひの心持も手伝つて、いつかそんなことを念頭から離れて、たゞいゝ氣持になつて歩みゆくのであつた。



中央の一人（これが勘十郎らしい）下知を下すと忽ちぐるりと云はず躍り出す一人、真向より斬下す。月光を浴びてその刀燃然。八郎兵衛の刀は鞘走つた、と、もう肩先深く斬り込まれて血煙あげてざつと倒れる。

「ひやっ」……

左右から一時に飛び来る烈刃、左の刀を下すと忽ちぐるりと云はず躍り出す一人、真向より斬下す。月光を浴びてその刀燃然。八郎兵衛の刀は鞘走つた、と、もう肩先深く斬り込まれて血煙あげてざつと倒れる。

「ひやっ」……

左の刀を下すと忽ちぐるりと云はず躍り出す一人、真向より斬下す。月光を浴びてその刀燃然。八郎兵衛の刀は鞘走つた、と、もう肩先深く斬り込まれて血煙あげてざつと倒れる。

「ひやっ」……